

考え、表現し伝え合う外国語教育の授業づくり —小学校第4学年の外国語活動の実践を通して—

松下 大介* 小林 佳愛*
林 裕子** 吉村 圭**

A Report on Designing the Lessons

to Think, Perform and Interact :

Focusing on the Practice at the Grade 4 English Class

Daisuke MATSUSHITA
Yuko HAYASHI

Kanae KOBAYASHI
Kei YOSHIMURA

【要約】本研究では、小学校外国語教育において、学習過程、Small Talk、中間指導という3つの視点で児童の指導や支援を行うことで、児童が考え、考えや気持ちを表現し伝え合うことができる外国語教育を目指す。内容においては、T2Rサイクルを用いた授業づくりを行い、Small Talkや中間指導を教師が目的をもって行うことで見られる児童の意識や活動内容の変容をそれぞれの項目から考察する。

【キーワード】外国語活動・外国語科、T2Rサイクル、Small Talk、中間指導

I 研究の概要

1 テーマ設定の意図

外国語活動・外国語科（以下、外国語教育）において、近年の全国の取組に目を向けると、直山（2020）は、学校によっては言語活動の意味と「言語活動を通して」の「通して」の理解が十分でないことを課題の1つに挙げている。学校現場ではこの文言の意味を再確認するとともに、パフォーマンス課題の解決に向けて1時間目から言語活動を通した指導を実践し、児童にコミュニケーションを図る素地、または基礎となる資質・能力を育成することの共通理解が求められている。前研究では、「自分の思いや考えを伝え合う力を育てる外国語活動・外国語科の授業づくり」に取り組み、TLC（Think・Learn・Communicate）サイクルの実践を通して言語材料への慣れ親しみと実際のコミュニケーション場面における技能面（言語材料の活用）と態度面（相手への配慮、達成感）の向上を目指して研究を行ってきた。TLCサイクルを用いたことにより、相手に考えや気持ちを伝えられた喜びを感じたり、互いを配慮したりする児童の姿が見られた。しかし、伝え合う内容を広げたり深めたりするという点では課題が残った。そこで、TLCサイクルを見直し、再整理することにした。

小学校外国語部会では、言語活動を通した授業を行い、伝え合う活動を広げたり深めたりする手立てを講じることで、自分の考えや気持ちを表現し伝え合うことができるようにしたい。そこで、

言語活動が充実し、伝え合う活動が深まるための手立てを打つ。そのことが、言語材料の活用という技能面の向上にもつながると考える。言語活動を通して、伝えたい内容を既習語句や表現を使ってどのように伝えるのか、どうすれば相手に分かりやすく伝わるのか考え表現し伝え合う児童の姿を見取っていく。この「言語活動を通して、伝えたい内容を既習語句や表現を使ってどのように伝えるのか、どうすれば相手に分かりやすく伝わるのか考え、表現し伝え合う」ことを外国語教育における深い学びと定義する。外国語による深い学びを実現するために、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、学習活動に取り組むことができるように授業をつくる必要がある。

現状や前研究から見えた課題を解決し、外国語教育における深い学びを実現するために、伝え合う活動の広がりや深まりのための手立てが児童の深い学びにどう影響するかについて研究を進める。

2 「考え、表現し伝え合う」とは

外国語教育は、国語科同様、言葉の学習であり、人と人とのつながりが重視される。そのため、言語活動を通して他者について考えたり寄り添ったりしながら実際に行動するといった、相手意識や目的意識をもつことも大切である。そこで外国語教育の授業では、友達をはじめ、上級生や下級生、教師などと受信・発信活動を有意味な文脈の中で繰り返すことで、児童が自ら伝えたい考えや

*佐賀大学教育学部附属小学校

**佐賀大学教育学部

気持ち等を相手に寄せながら技能や自信を高め、互いのコミュニケーションが深まるように促すことが大切である。

これまで伝え合う力の育成を中心に研究を行ってきた。伝え合うためには、まず伝えたい内容をどのように伝えるか、相手に分かりやすく伝わるのかと考えたり、自分のことを表現したりすることが大切であると考え。そこで、本研究において考えることと表現することを加えた。「考える」とは、何のために伝えるのか、どんな場面で、どんな言語材料を使い、どのように伝えるか、どうすれば伝わりやすいかを考えることである。更に、相手の考え方や背景を考慮するといった他者について寄り添うこととする。「表現する」とは、自分の考えや気持ちについて話したり、自分のことについて（なぞったり写したりして）書いたりすること、相手の考えや気持ちを聞いたり読んだりした時に反応することと考える。そして、「考え、表現し伝え合うこと」を、言語活動を通して「他者に伝えたい情報を整理しながら考えを形成し、他者に配慮しながら自分の考えや気持ちを表現したり伝えたりする」とことと捉える。このことが中学校における「自らの考えを伝え合おうとする生徒の育成」へつながる。

II 研究の内容及び計画

1・2年次で TLC サイクルを再整理する。更に、2年次には、自分の考えや気持ちを表現し伝え合う力を育てる授業実践を行い、3年次で言語活動を通して、深い学びを実現するための手立てや学習過程についての考察を行う。

以上のような計画を踏まえて、次の3つの柱を深い学びを実現するための手立てとして研究を進める。

- 柱1 考え、表現し伝え合う姿を目指す学習過程
- 柱2 身に付けた言語材料を総合的・創造的に使用しながら、即興性・発展性のあるやり取りするための Small Talk
- 柱3 相手意識や表現の工夫を思考し、よりよいコミュニケーションにつなげるための中間指導

III 研究の詳細

1 TLC サイクルの整理：「T2R サイクル」

外国語教育において、児童がどのような学びのサイクルを回して、技能面の向上や深い学びに向かっていくのかという点で前研究の TLC サイクルを整理した（図1）。

前研究における TLC サイクルは、Think を「思考／試行」する場面、Learn を学ぶ・学び合う「判断」の場面、Communicate を「伝え合い」と「振り返り」の場面と、3つの場面を関連付けながら「思考・判断・表現」を深めさせていく循環的な

学びのサイクルとして設定していた。

T2R サイクル（図2）は、前研究の TLC サイクル同様、相手とよりよいコミュニケーションを

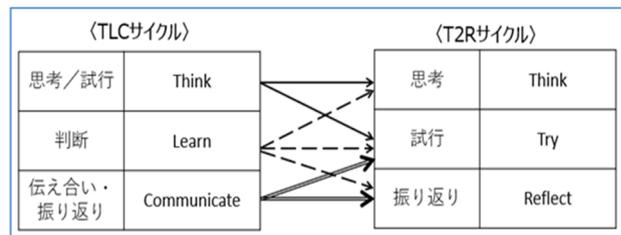


図1 TLC サイクルの整理

図ることを目的に、図1のように整理した。まず、【Think】において、思考と試行を切り離して、それぞれ別の場面として設定した。本研究では、試行を、【Communicate】における伝え合いの部分と同じと捉え、【Communicate】から振り返りの部分を切り離した。【Learn】については、どの場面にも位置付くものとして考えることとした。

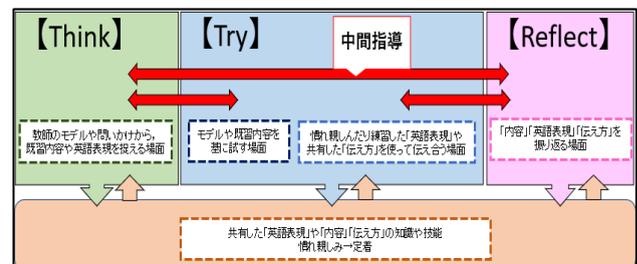


図2 T2R サイクル

T2R サイクルでは、どんな情報を伝えるか、自分が伝えたい思いをどう表現するか、どんな言語材料を使えるか、どうすれば伝わりやすいか考える（【Think】）。そして、実際のコミュニケーションの中で試しながら、言語活動を行う（【Try】）。そして、どんな工夫をしたら分かりやすく伝えられるか、どのように情報を整理したか振り返る（【Reflect】）。このサイクルも一方向の過程ではなく、単元や一単位時間の中で、何度も行き来したりスパイラル的に循環したりするものである。教師が T2R サイクルを意識して授業を行うことで、児童が考え、表現し伝え合う様子が明確になると考える。

2 身に付けた言語材料を総合的・創造的に使用しながら、即興性・発展性のあるやり取りするための Small Talk 【柱2】

える活動を広げ深めるための手立ての1つとして、高学年の外国語科で行われている Small Talk を中学年の外国語活動においても実態に応じて設定する。Small Talk とは、本来、高学年で設定されている活動であり、「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」（文科省、2018a：130）である。Small Talk を行う意図は、①既習表現を繰り返し使用し、慣れ親しみや定着を図ること、

②対話を続けるための基本的な表現や続け方の指導をすること（文科省、2018a）である。教師同士のやり取り（デモンストレーション）、教師と児童のやり取り、児童同士のやり取りがあり、児童の発達段階や扱う内容によって形態を変えて取り入れる。中学年においては、児童は教師同士のやり取りを十分に見たり聞いたりし、教師とのやり取りを行うことが中心となる。その経験を積み重ねることによって、高学年で抵抗を感じることなく、伝え合う活動に取り組むことができ、単元を通して既習表現や新出表現に慣れ親しんだり、対話を続けたりすることができるようになる。更に、テーマや使用する表現などについて計画的・系統的な Small Talk を行うことで、表現の慣れ親しみや定着が図られ、対話を続けるための基本的な表現や続け方の定着も期待できる。それらの表現を目的、場面、状況等に応じて使えるようになれば、言語活動が充実し、自分の考えや気持ちを表現することができるようになる。と考える。

3 相手意識や表現の工夫を思考し、よりよいコミュニケーションにつなげるための中間指導

2つ目の手立てとして、中間指導を設定する。中間指導とは、言語活動の途中に児童の活動の状況を見取り、どの児童も単元や単位時間の目標達成に向かうように学習内容や言語材料について確認したり情報を共有したりした上で、指導を行うことである。中間指導の視点としては、①コミュニケーションの目的や本時のねらいを確認すること、②児童の疑問点・困り感を取り上げて、共有・解決すること、③よいコミュニケーションの様子を共有し、外国語教育の目標に向かわせることである。中間指導は、教師が単位時間内、または、単元内での評価規準を意識して児童の様子を常に見取りながら行う。その際、よい例ばかりを教師側から提示するだけではなく、児童と一緒に友達のよい点について考えて、共有するなどの工夫が必要である。そうすることで、思考を伴う言語活動の積み重ねが可能になり、児童が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して伝え合うことができるようになる。そして、既習の表現を必要に応じて活用できるようになる。

IV 研究の実際

児童が T2R サイクルを繰り返しながら活動できるように設定することで、考え、表現し伝え合うことができるようになる。そして、Small Talk を行うことで、既習表現を繰り返し使ったり対話を続けたりして、伝え合うための技能面や態度面が少しずつ身に付き、使えるようになることが期待される。中間指導はそれぞれの場面の接続を促し、言語活動を円滑に循環させる役

目を担う。Small Talk や中間指導という手立てを講じることで児童の深い学びの実現につながるだろう。

1 分析の方法

(1) 分析のリソースについて

分析のリソースは、本授業における児童の活動の様子把握に加えて、児童の振り返りの記述内容と児童の発話記録とする。各授業における児童の意識の変化、発言や振り返りシートの記述内容から、児童の技能面（言語材料の活用）の向上と深い学びを実現するための手立てとしてどのように影響するのかについて質的に検証する。柱1は児童の活動や振り返りの内容から、柱2は児童の振り返りの内容、柱3は中間指導前後での児童の発話記録と振り返りの内容から分析する。

(2) 抽出児童について

本学級の児童は、事前の意識調査（回答31名、欠席等のため無回答3名）から、9割の児童は友達やALTなど相手のことを考えながら活動に取り組むことができていると感じている。自分の思いや考えを英語で紹介することが好きと感じている児童も9割であった。理由として、「友達に自分のことを知ってもらおうと仲良くなれるから」と相手との関わりについて肯定的なものが多かった。しかし、実際に児童の活動の様子を見ると、正しい表現でもっと自分のことを伝えたいと戸惑う姿が見られた。インターネットの翻訳機能を使って、コンピュータの訳する英語で表現しようとしていたことから、正確さを求め、聞く人が分かりやすいかどうかという相手への意識が低い児童が多いと捉えた。この児童の実態を踏まえて本実践を通して、相手に配慮して相手に伝わるように工夫し、考え、表現し伝え合う外国語教育の授業づくりとその手立ての有効性を述べていく。各手立てについては、3名の児童を活動の様子や語彙量等から抽出し（表1）、具体的な場面での活動や記述の内容から考察する。

表1 抽出児童のプロフィール

		A 児
児童の様子		課題解決に向けて進んで活動に取り組む。伝えたい気持ちはあるが、どう言っても戸惑っている。
	言語面	○
	態度面	○
	内容面	▲
児童が設定した単元を通した目標		道案内やお気に入りの場所を伝えよう

※ 言語面、態度面、内容面に対する教師の見取り
 ○：できる ▲：あまりできていない、または、不十分

2 研究の構想を取り入れた単元の概要

（単元名「紹介します！わたしのお気に入りの場

所 ～This is my favorite plaCe.～」，対象学年・児童数：第4学年，実施時期：令和4年11月）

本単元は、Let's Try! 2 Unit 8 “This is my favorite plaCe.”の単元を基に内容を児童の実態に合わせて構成したものである。本単元の目標は、いつも職員室と教室のみを往復しているALTに自分たちのお気に入りの場所を伝え、もっと附属小のことを知ってもらうことである。相手に伝わるように紹介するために、児童の興味・関心やALTへの思いに沿ってパフォーマンス課題を設定した。本単元でカギとなる英語表現に出合わせ、“I like ～.”や“I want ～.”など既習表現も使って自分のお気に入りの校内の場所を工夫しながらALTや友達といった相手に分かりやすく伝えようとする能力の育成を目指して構成した。

本単元における「深い学び」とは、まず、「お気に入り」を意味する“favorite”を使ったり既習表現を用いたりして、その場所でできることや好きな理由等を加えることで、相手に分かりやすく伝えようと考え、表現することである。そして、もう一つは、やり取りや発表において、視覚補助を用いたり目線や表情などで特徴や魅力を強調したりすることで、favoriteに込められた思いについて知り、学校のお気に入りの場所についての理解とともに相互理解を深めることである。本校が分類・整理した外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら学ぶ、本単元における児童の姿を全体要項の「深い学び」と関連させると、表2のようになる。

表2 本単元及び本時における「深い学び」に関わる児童の姿

①	パフォーマンス課題の解決に向けて、毎時間積極的に取り組む姿であり、単位時間ごとの振り返りを基に、できたことや発見・再発見したことを次時に向けた課題に設定し、学習に向かおうとしている。
②	単元を通して、校内のお気に入りの場所を案内したり伝えたりするために、伝える内容を方略的に考えながら、自分の考えや気持ちを相手に伝えている。
③	「お気に入りの場所」や「理由」の内容について、既習表現を活用することで、表現に慣れ親しむと同時に、他の場面でも使えることに気付く。
④	結論→根拠・理由の順で伝えると分かりやすいことを、今後の活動やテーマでも生かそうとしている。
⑤	国語科等で学習した相手に伝えるために気を付けるポイントを意識し、分かりやすく伝えようとしている。

表2のような小学校外国語教育における「深い学び」を実現するために、前要項で語られたTLCサイクルを見直して整理し、言語活動の充実を目指した手立てを講じることにした。

その一つとして、T2Rサイクルを基にして授業づくりを行った(表3)。

今回の研究では、T2Rサイクルを教師のみが意識して授業を行った。第1時目では、「ALTに伝える」という相手意識を含んだパフォーマンス課題を共有し、ゲーム活動を通して方向や教室名などを伝えるために必要な英語表現に慣れ親しんだり練習したりするようにした【Think】。第2、3時目には、児童は表現に慣れ親しみ、慣

れ親しんだ表現が友達に伝わるか考え【Think】、実際に使えるか試していた【Try】。そして、試してみても伝わるのかどうか振り返り【Reflect】、伝わらなければどうすればよいか、どんな工夫をすれば分かりやすく伝えられるか考えていた【Think】。第4、5時目では、児童は、前時までに慣れ親しんだ表現を実際にALTへの紹介で使おうとしたり【Try】、戸惑った時には【Think】に返ったりしながら単元のゴールに向けた活動に取り組んだ。また、児童同士で紹介の内容を伝え合う場面を設定したことで、児童自身の内容や伝え方を振り返ることができたと同時に、友達同士で教え合い、振り返る機会を作ることができた【Reflect】。

表3 本単元の構成

	T2R サイクル	主な学習活動	研究の柱に関わる働きかけ
1		<ul style="list-style-type: none"> ○テーマを基に、課題を共有した。 ○必要な表現等単元の見直しをもった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマを基にパフォーマンス課題を設定し、ゴールの活動まで単元を見通すことができるように声掛けをした。【Think】
2		[Small Talk]	<ul style="list-style-type: none"> ・教室名や方向の言い方に、単元のゴールを見通して慣れ親しむことができるようにした。【Think】
3		<ul style="list-style-type: none"> ○ゲームやチャンツを通して、教室名や方向の言い方に慣れ親しんだ。 ○発表の準備や練習をした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表で使う表現や発表の仕方を確認して、よりよい発表になるように準備や練習の時間を設定した。【Try】 ・それまでの活動を振り返る時間を設定した。【Reflect】
4		[Small Talk]	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が考えたお気に入りの場所について、友達をALTとして相手に伝わるように分かりやすい場所を紹介した。【Think】【Try】【Reflect】
5		<ul style="list-style-type: none"> ○前時で見付けたり気付いたりした課題を解決した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に見付けたり気付いたりした課題を振り返りながら活動するように声掛けをした。【Think】【Try】
6		<ul style="list-style-type: none"> ○ALTにお気に入りの場所を紹介した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALTに附属小のことが伝わるようにお気に入りの場所を分かりやすく紹介するように促した。【Try】【Reflect】

(1) T2Rサイクル【柱1】の効果—A児の例
 具体的にA児の振り返り(表4)の記述内容から述べる。A児は、第2時目に「分かりやすくしたい。…(中略)…どう話そうか調べるのが楽しかった」(表4波線㊸)と記述している【Think】。第4時目では、自分のお気に入りの場所を紹介していく(【Try】)中で、表4波線㊸のように、友達を紹介を聞き、友達のことを知ったりアドバイスをもらったりすることができた。そして、表4波線㊸のように活動を受けて、もう一度確認するように自分の中で振り返っている(【Reflect】)。言語活動を通して、A児は相手にとって分かりやすい表現を模索したり、やり取り

の中で試したりしながら、自らの伝え方を更に工夫している。これは、相手とよりよいコミュニケーションを図ることに向かっている姿である。

A 児の活動の様子や振り返りは一例である。他には、結論と理由のどちらを先に述べると伝わりやすいかという視点で考える児童の様子も授業を通して見ることができた。教師が T2R サイクルを意識して学習活動を設定すると、本サイクルにおける児童の位置を把握することができ、児童の困り感に気付いて必要な支援につなげることができる。そのことで、児童は、他者に伝えたい情報を整理しながら考えを形成し、他者に配慮しながら自分の考えや気持ちを表現したり伝えたりすることができる。と考える。

表4 A 児の振り返り

過程	T2R サイクル	A 児
単元を通した目標		道案内やお気に入りの場所を伝えよう
1時目 【Think】	Think ↓ ↑ Try ↓ Reflect	たくさんの英語を知れたのでよかったし、むずかしかった。次は、まよわず案内しよう！
2時目 【Think】 【Try】 【Reflect】		前回よりは案内できた。もっとスラスラ話せて⑥分かりやすくしたい。じゅんびをして写真をとったり、どう話そうか調べるのが楽しかった。
4時目 【Think】 【Try】 【Reflect】	Think ↓ ↑ Try ↓ Reflect	話をして、⑥アドバイスやその人のことを知れたのでたくさんのことを取り入れたい。次は、かんぺきになるように⑥もう一度かくにん。
5時目 【Think】 【Try】 【Reflect】		今日は動画をとって友達としました。正しく英語が言えたのでとてもうれしかったし楽しかったです。
6時目 【Try】 【Reflect】		I like などこの単元でしか言わないことをたくさん知った。

※ 第3時目は、振り返りの設定なし。振り返りは児童の表記のまま。以下同

よって、柱1の T2R サイクルについては、教師が意識して授業づくりを行うことで、児童が表4のように活動場面や内容によって本サイクルを回しながら学びに向かうことができる。本単元で児童は、T2R サイクルの中で活動することで、①「ALTにお気に入りの場所を紹介しよう」というパフォーマンス課題の解決に向けて、毎時間積極的に取り組んだ。そして、単位時間ごとの振り返りを基に、できたことや発見・再発見したことを次時に向けた課題に設定し、学習に向かおうとする姿が見られた。そして、何度も考え、試して振り返る中で、④結論→根拠・理由の順で伝えると分かりやすいことを、今後の活動やテーマでも生かす姿が見られた。教師が T2R サイクルを意識して授業を行うことで、児童が考え、表現し伝え合う様子が明確になることから、T2R サイクルは児童の深い学びの育成に有効であると考える。

(2) Small Talk【柱2】の効果—B 児の例

本単元では、“My favorite (place) is ~.”や方向、学校の場所を本単元の言語材料として設定し、表現への慣れ親しみと活用を目指して学習を進めた。方向や教室名などの学校の場所については、ゲーム活動を使って慣れ親しむ活動を設定してきた。これらの活動だけでは“My favorite ~.”について、慣れ親しみは不十分であると見取った。

そこで、Small Talk を、中学年から、発達の段階や既習表現の量を考慮して、図4のように教師と児童のやり取りの形態で取り組んだ。第2時目及び第4時目では、“favorite”に聞き慣れることに焦点を当てた。第2時目には「好きな天気と遊び」、第4時目は「好きな曜日、月、季節」(表5)をテーマにして Small Talk を行った。本時では特に、曜日を用いた通常のあいさつの場面で行った。

まず、曜日を尋ね(表5下線①)、無作為に抽出した児童を指名して、“favorite”を使った質問(表5下線②)を行い、児童の答えを教師が繰り返す(表5下線③)答え方の共有を図り、全体へ同じように尋ねた(表5下線④)。

B 児は、第4時目に『マイフレバリー(My favorite is) ...』とあいさつをしてがんばろう(表6波線⑩)というめあてをもっている。このここで、Small Talk を聞いて、その中の表現を活動や紹介に取り入れようと意識していたことが分かる。更に、次時にも、友達は“My favorite is ~.”を使って紹介していたことや友達を見習って何度も繰り返して少し言えるようになったと振り返っている(表6波線⑨)。このことから、既習表現を繰り返し使用し、慣れ親しむことができていると考える。

次に、前研究の課題として挙げた会話の広がりや深まりの点でも効果があると考え。まず、会話の広がりについては、表5下線⑥でそれまでの曜日についてのやり取りを、会話を広げるために「好きな月」というテーマで行った。使っている表現はほぼ変わらず、児童は表5下線⑤の day を month に置き換えてやり取り(教師の質問に対する答え)に取り組むことができていた。

また、深まりについては、表5下線⑤で好きな曜日を尋ねるにとどまらず、挙手がなかった曜日について全員に向けて理由を尋ねた。このことが表面的なやり取りで終わるのではなく、内容について問いかけを行い、会話を深めることにつながっていると考える。

更に、本研究における Small Talk の意図についても効果があったと捉える。それは、表5下線⑤の質問に対しての反応から見取ることができ。それまで児童は“Why?”や“Do you like ~?”をそれぞれ別々に聞いたり言ったりしていた。

表5 本時における Small Talk のスクリプト

T : ① What day is today? It's Sunday, Monday?
 Ss : Wednesday.
 T : That's right. Today is Wednesday.
 Well, what's your favorite day?
 ② (S1) , what's your favorite day?
 S1 : Sunday.
 T : ③ Your favorite day is Sunday.
 (全員に) ④ What's your favorite day?
 Sunday, Monday, Tuesday, Wednesday,
 Thursday, Friday, Saturday?
 Ss : (挙手)
 T : ⑤ Why don't you like Wednesday?
 Ss : 漢字の宿題があるから...
 T : OK, thank you. Well, next question.
 What's the date today?
 Ss : November ... 30.
 T : Yes, today is the last day in November.
 What is the next month?... DeCember
 First.
 Well, ⑥ what's your favorite month?
 ... (以下省略) ...
 (T : 教師, Ss : 複数児童 以下同)

表5下線⑤では、その2文をつなげ、更には don't という表現を加えて尋ねるようにした。それに対して、ある児童らは宿題や本人にとって否定的なものを理由に反応することができた。これは、これまで慣れ親しんだ表現を想起したり結び付けたりして総合的に考えている姿である。このように、児童が場面に合わせて相手に伝えようとする経験を通して、即興性を身に付ける素地を養うことができると考える。本実践では、教師が話題を広げ深めるきっかけを与えたが、この経験を積み重ねることで、高学年では、児童自身で話題を広げ深めて会話を続ける姿が期待できる。そして、Small Talk の積み重ねが中学校における話す活動へとつながるだろう。



図4 Small Talkの様子

表6 B児の振り返り

1時目	たくさんの人に (ALTにも) 自分のお気に入りの場所をしようかしたい。 たくさん場所の英語を言えるようになろう。
2時目 【Small Talk①】 What's your favorite weather?	じゅんぴをして思ったことは、じょうずに (ALT) にしようかいて学校のことを分かってもらいたいです。
4時目 【Small Talk②】 What's your favorite day?	はじめのあいさつとおわりのあいさつをしていなかったの で、今度の授業で取り入れた い。 d 「マイフレバリー (My favorite is) ...」とあいさつしてがんばろう。
5時目	e みんな「マイフレバリー (My favorite is) ...」と話していたけどできなかったから他の人を見習ってまねして言えるよ うになりました。(少しだけ)
6時目	みんなに教わってできるようになった。

Small Talk は、前述の2つの意図で、教師同士や教師と児童とのやり取りを中学年から取り入れた。児童は Small Talk を通して、B児のように favorite のような単元の中心となる表現に慣れ親しみ、教師とのやり取りの中で理由を加えるとより分かりやすくなることに気付くことができた。また、Small Talk の中で知らない表現が出てきたときには、何とかして意味を推測していた。このことが、②単元を通して、校内のお気に入りの場所を案内したり伝えたりするために、伝える内容を方略的に考えながら、自分の考えや気持ちを相手に伝える姿と、③「お気に入りの場所」や「理由」の内容について、既習表現を繰り返し用いることで、表現に慣れ親しみ、他の場面でも使えることに気付く姿につながる。

以上から、高学年からの Small Talk の前段階として、中学年から導入し、既習表現を用いた活動を続けていくことは、考え、表現し伝え合う手立てとして有効であると考えられる。

(3) 中間指導の効果—C児の例

前述した通り、中間指導は、主に3つの視点で行い、外国語教育の目標に向かわせる。本時においては中間指導を2回行った(表7)。1回目は、コミュニケーションに対する態度面について、2回目は、伝え合いの中で児童自身が疑問に思ったこと・気付いたことについて共有する中で、相手に分かりやすい紹介にするという本単元の目

標に向かう（下線⑨）視点が現れた。ここでは、教師の問いかけ（下線⑨）に反応した児童（C児）の言動とともに中間指導の場面を見ていく。1回目の中間指導では、相手の目を見ることと伝える初めと終わりの言葉に着目させるために、モデルの児童を抽出し、全体で態度面について情報を共有した（下線⑧～⑩）。多くの児童は、中間指導の前にも“Hello”と言っていた。しかし、紹介の終わりの“Thank you”を言っていない児童が多かった。これまで国語科の発表の単元で繰り返し指導してきた、相手を見てはっきりと伝えることや、相手と会話する際に配慮することを考えられるように繰り返し意識付け、紹介の終わりの表現にも着目させるように声掛けをした（下線⑪、⑫）。その後は、ほぼ全員が紹介の中に“Hello”や“Thank you”を入れて伝えることができていた。2回目の中間指導では、S9とS12の疑問や気付きを全体に広げ、自分のお気に入りの場所について詳しく伝える方法を考えた（下線⑮、⑯）。お気に入りの場所の紹介だけでは分かってもらえないのではないかという疑問（下線⑰）に対して、その後、数名の児童から道案内の動画を加えるという解決に向かう意見が出た（下線⑰）。C児は、「職員室から案内する」とALTのことを考えて発言していた（下線⑳）。

表7でC児の活動の様子から、中間指導（1回目）の前までは、タブレット端末で写真やイラストを友達に見せることに熱中してしまい、相手と互いにお気に入りの場所のみを伝えるだけにとどまっていた。中間指導（1回目）を終えると、C児は、態度面（あいさつをする、相手の目を見て伝える、相づちを打つ）にも気を付けつつ、これまで慣れ親しんできた表現を使いながら、やり取りを行っていた（表7下線⑬）。中間指導（2回目）後も、C児は態度面と内容面（道案内やお気に入りの場所を内容のまとめりとして伝える）に気を付けている様子が見られた（表7下線⑬）。C児の変容について、授業後に聞き取りを行った。そこで、C児は、中間指導を経たことで自分なりにこれまでの学習を振り返ることができたこと、これまでに慣れ親しんだ表現や国語科で学習した相手に分かりやすい伝え方を想起し、「使ってみよう、やってみよう」と思って取り組んだと述べていた。このことから、C児は、言語面と内容面においても向上したと捉えることができる。

また、中間指導を取り入れた学習を設定したことで、数名の児童の振り返りが次のように変容した。それは、第1時目は主に言語面に関する内容だった記述が、第2時目以降は態度面だけでなく、内容面に関する記述に変わっていた。また、別の児童らについても、第1、2時目は言語面の気付きが目立っていたが、第4時目以降は態度面、内容面の記述も多く見られるようになった。このこ

表7 本時における中間指導の実際（C児の例）

<p>T : My favorite のほうがより大好きと伝わるので、使ってみましょう。 C児 : My...favorite... T : では、伝え合ってみましょう。Hello. C児 : Hello. えーっと、...用意できてる？ S2 : I like playground beCause I like basketball. C児 : I like gym beCause I like volleyball.</p>
<p>中間指導（1回目） T : OK, stop. 2人のやり取りがよかったです、 ⑦どこがよかったのか探しながら見てください。 S3 : Hello. I like arts and Crafts room beCause I like Crafts. S4 : Hello. I like Classroom beCause Japanese. Thank you. T : どこがよかったですか。 S5 : ⑧相手の目を見ていた。 S6 : ⑨うなずいて聞いていた。 T : ⑩両方とも相手の目を見て言えていたのがよかったですね。他には？ S : ... T : 2人とも言う前に Hello, 今から話しますよって合図していましたね。 ⑪次は友達のよかったところも取り入れてやってみましょう。 じゃあ、⑫自分の紹介が終わってからのあいさつは何と言えがいい？ S7 : Thank you. T : Thank you と言えがいいですね。OK.</p>
<p>C児 : My favorite is gym... どうだったっけ？ BeCause I like volleyball and ...big. S8 : 広い？ C児 : おもしろいでしょ？ Thank you. See you. (違う児童とペアになり) ⑬Hello. My favorite is gym beCause I like volleyball. It's ... Thank you.</p>
<p>中間指導（2回目） T : 今何人かの友達に紹介していますが、何か困ったことはないですか？ T : 今ね、⑭S9とS12が疑問点、提案が出てきたので聞いてみましょう。 S9 : ⑮ALTは場所の紹介は分かるけど、そこがどこか分からないと思うから... S10 : ⑯そこが好きって言っても、そこがどこか分からないと... S11 : じゃあ、...⑰行き方を動画にしたらいいんじゃない？ S12 : ⑱場所だけだったら分からないから、道案内が必要だから動画を入れたほうが良いと思う。 T : 今、みんなは、⑲お気に入りの場所とその理由だけ伝えているけど、でもALTは職員室と教室しか行き来していないので、お気に入りの場所だけ言われてもどう行けばいいか分からない... C児 : ⑳職員室から案内する。 S13 : あー、いいね。 T : それで場所の問題は解決できそうですね。 ... (以下省略) ...</p>



とから、ALTに分かりやすく伝えることを強く意識して活動に取り組むことができようになったと考える。

中間指導を手立てとして取り組むことで、「深い学び」の④と⑤の姿を育てることができる。本単元においては、C児の様相から見るることができる。C児はSmall Talkで慣れ親しんだ教室や方向の表現や何度も聞いたfavoriteを使おうとしたり、中間指導から態度面と技能面について考えたりして伝え合い、初めよりもよい紹介にすることができた。そして、教師が視点をもって行った中間指導を経て、児童は国語科で学習した相手に分かりやすい伝え方、相手と会話する際に配慮すること等を意識していた点から、特に言語を扱う教科である国語科との関連を考えながら取り組むことができたと言える。

以上から、教師が視点をもって中間指導を複数回行ったことで、児童が学習活動の目的や言語の使用場面を意識して伝え合うことができるようになり、既習表現を必要に応じて想起したり、活用したりする姿が見られた。これは、児童が、他者とのつながりを意識して、伝え合うことができるようになってきているということである。したがって、中間指導は、考え、伝え合い表現する力の育成、更には外国語教育における深い学びの実現にとって有効な手立てであると考えられる。

V 研究の整理

1 研究の成果

- 本研究では、教師がT2Rサイクルを意識して授業づくりを行った。中学年において児童が教師同士のやり取りを十分に見たり聞いたりし、教師とやり取りを行う経験を積み重ねることができるSmall Talkを導入した。これらは、児童が他者に伝えたい情報を整理しながら考えを形成し、他者に配慮しながら自分の考えや気持ちを表現したり伝えたりする、児童の深い学びの実現に有効であった。
- 中間指導を通して、児童は目的を明確にして活動に取り組んだり言語の使用場面を意識して伝え合ったりすることができるようになった。そして、伝えたい情報を整理しながら考えを形成し、他者に配慮しながら自分の考えや気持ちを伝える力を高めることができた。

2 今後の展望

既習表現の慣れ親しみや定着が図られ、対話を続けるための基本的な表現や続け方の定着も期待できるため、今後はテーマや使用する表現など計画的・系統的なSmall Talkの実践を行う。その際、外部と連携して実際の英語による交流の場面で児童がどのように考え、表現し伝え合うのかについて考察していく。また、教師と児童が協働して授業づくりを行う視点から、T2Rサイクル

を児童とも共有し、児童がそれぞれの過程でどのように意識をして学習活動に取り組んでいるか、発話データや振り返りシートの分析等を行いながら研究及び実践を進めていく。

【主な引用・参考文献】

- 佐賀大学教育学部附属小中学校 (2020) 『教育紀要 第5号 (外国語 (活動) 科/英語科)』
- 川村一代 (2020) 「外国語 (英語) 科におけるSmall Talkの指導 ～小学校での実践と中学校への提言～」 『皇學館大学紀要』第58巻 pp.110-135
- 直山木綿子 (2020) 「新学習指導要領全面実施に向けて取り組みたいこと」 文部科学省 『初等教育資料』令和2年1月号 東洋館出版社 pp.46-49
- 文部科学省 (2018a) 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』 旺文社
- 文部科学省 (2018b) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂